

読みたがらない本を読ませるには

お母さん方の訴えられる悩みの一つに、「うちの子供は、漫画やテレビばかり楽しんでいて、親が読ませたいと思って買ってきた本には目もくれないのですよ。どうしたら、ためになる本を読むようになるでしょう」ということがあります。

これは、今の教育では、当たり前です。漢字が読めないのでは、漢字を多く使って書かれた“ためになる本”は、歯がたちません。そうかといって、“かなばかりのためになる本”は、これまた読みにくくて、子供に敬遠されます。

“かな”ばかりの本というものは、おとなでも読みにくいものです。新聞が“かな”ばかりになったら、今までの二倍、三倍の時間をかけても、内容がつかめないでしょう。子供ではなおのこと大変なはずです。

事実、石井方式で育った子供たちは、「かなばかりの本は読みにくくて、読む気がしない」と、はっきり言っています。そして、漢字を多く使った、“ためになる本”を、むさぼるように読んで、かなばかりの漫画本など、見向きもしません。

私たちは、感動をもって読んだ文学作品が映画化された時、期待をもってこれを見ますが、いつもその期待は裏切られます。

私たちが、読書によって心に描いた世界は、この世の中で最も美しい世界だと思えます。読んで心に描き、心に描いてはまた読み続ける、こうして展開された物語に比べたら、どんな巨匠による、どんな名優による演技も、とても及ぶものではありません。

その意味では、“読書の楽しみ”は、この世の最高の楽しみだと思います。しかも、私たちは、この“読書”によって、人間的に精神的に成長が遂げられるのです。

私たちは、子供たちに、まず何よりも“読書”する能力をつけてやらなければなりません。“読書力”それは結局“漢字力”で、漢字を理解する能力ということになります。

“ためになる本”を読まないのは、それを読む力がないからです。本そのものに興味があるもないも、読めないことには話になりません。それは、歯のない人に「するめはおいしいよ」と言ってすすめるようなものです。

“ためになる本”を与える前に、まず、それが“読める”力を与えてやらなくてはなりません。“読める”力さえついたら、読むなと言ったって、子供は本を読まずにはおきません。